

お誕生

住所	氏名	性別	保護者
白旗上	山下日向	女	祐二
早川内	佐村真莉	女	寿孝
豊横田	宇土初里	女	寛佑一
吉中	田永俊	女	恵純
津志田	本田さ	女	裕恵子

ご結婚

住所	氏名
山都町	舛田剛樹
船津	金森友里恵
熊本市	伊藤辰徳
横田	岩越里恵
吉田	清住元一
熊本市	一村知勢子

おくやみ

住所	氏名	年齢	世帯主
下横田	浅木真一	85	真也
西寒野	大久保勝三	78	修
中山	北永サヨ	83	敏春
芝原	井上誠治	64	克子
船津	松本敏明	88	勝義
下横田	本村一之	85	一徳
岩下	内田シカノ	101	乃武子
上早川	溜瀧笑子	84	三男子
横田	田上時雄	95	和博
糸田	井芹ユキ子	80	博則
上早川	田上吉成	84	育生
上揚	赤星安博	68	清博
下横田	桑田孝喜	95	フサヲ
岩下	蛭原政武	51	めい子
上早川	溜瀧義晴	83	キミ工
糸田	松野テツ工	86	精喜
田口	上田眞澄	78	博子
下横田	篤岡良子	75	秀道
横田	山田道男	56	道男
上早川	美濃田ウメコ	96	絹子

〔町史編さんだより〕

甲佐を中世を通じて支配していたのは阿蘇氏でしたが、天正10年(1582)以降、島津氏から攻撃を受けるようになります。当時、益城郡の拠点は堅志田城(美里町)で、この城を奪取することが島津氏の肥後計略の重要課題となり、天正13年間8月13日の総攻撃によって実現します。

戦闘の様子を記した『上井覚兼日記』(島津家老の日記)によると、同時に落とされた城として「甲佐圍」の存在が知られます。「圍(かこい)」とは堀や土塁で囲まれた領土の拠点となる城郭で、島津軍は「甲佐圍」も「破却」して焼き払い占拠しました。この合戦は、島津氏の肥後における覇権確立をもたらし、後に豊臣大名が肥後に入る前提を形成したという意味で、ま

綿密な発掘調査が進む免の山の陣内館跡 (豊内)



さに肥後戦国史の終焉(えん)を告げるものとなりました。

同日記の記述を検討すると、「甲佐圍」はそれなりの規模を有し、堅志田城の緑川対岸あたりに存在したことが推測されます。その具体的な場所はどこで、どのような遺構が残っているのでしょうか。

甲佐の歴史を紡いで

～町史編さんだより(17)～

肥後戦国終焉の地「甲佐圍」

町史編集委員 稲葉継陽 (中世)

第一の候補地は、上豊内にある「松尾城跡」(町指定文化財)です。同地の小高い丘の上(標高90m)に堀や土塁および郭跡が残り、「本丸」や「味噌倉」の地名が伝えられています。第二の候補地は、下豊内にある「陣内館跡」(同)です。標高1

00mの丘陵台地上にあり、大規模な土塁を伴う幅20mの堀が方形の郭を作り出しています。規模はまれに見る大きさであり、この城を構築した権力の大きさが推測されます。

現在、これらに関する文献資料は確認されていません。しかし幸いなことに、「陣内館跡」については調査事業が開始されました。綿密な発掘調査によって、構築年代や築城当時の構造を知ることができるようになるはずですが。

肥後戦国史の画期となった合戦が展開された「甲佐圍」について、こうした調査の成果をも反映させながら、町史で考えてみたいと思います。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先  
町社会教育課町史編集係  
☎096・234・3310

編集後記

前ページの炭俵づくりに挑戦しているのは、宮内地区で地域の活性化に取り組み皆さん。わらを編む手元に目をやりつつ、「昔の人は、天気が悪い日は悪い日で、細かな手作業のいる仕事を文句も言わずがんばっていたんだねえ」と感心の一言も。現在、昔の暮らしの技や伝統に着目して受け継ぐとともに、地域の名産とならないかと思いをめぐらせ活動しています。

生活の中で切望するものを編み出すひらめき、希求されるものとなるよう産品を磨くはぐみ、そして、あまねく生活の中に広がりゆくつながり。時の流れとともに、この3つが重なり合い1つのうねりとなって、初めて名産が誕生するのでしょうか。

これからの活躍次第で、昔の暮らしの温もりを感じられる、地域の名産の誕生となるか、今後注目です。

DATA		
平成21年12月31日現在		
人口・世帯数	増減	
男	5,353	△23
女	6,110	△5
計	11,463	△28
世帯数	4,136	△4